

當浦は扶桑において名たる勝地にして、古人の秀詠多ければ壹人一首を粗亥るせり、東西廿餘町ありて、濱松の色濃、あしへの田鶴、波間のちどり江水は洋々たり、東方には名草山、金剛寶寺のかねの聲は悠揚として月に清く、霜にさえたり、東南には生石が峯つらなりて藤白の御坂翠巒たかくそびへ、麓には冷水浦、鹽津浦のみなと賑はしく、西海、北海、四國の商船、あるひは關東廻りの出船入船ありて、商家の軒をつらねしも鮮に見えたり、西南は蒼海漫々として、大鵬九万里に羽を打候あり、うらの初島、あら磯にみるめかるわらは、千尋の底にあはびとる海士、潮汲む亥づのめ、みな世をわたる業くれさまぐにして、いづれか哀れならざるはなし。○下略

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月辛卯、天皇幸紀伊國、壬寅、詔曰、登山望海、此間最好、不勞遠行、足以遊覽、故改弱濱名爲明光浦、宜置守戶、勿令荒穢、春秋二時差遣官人奠祭玉津島之神明光浦之靈、

〔萬葉集雜歌〕神龜元年甲子冬十月五日、幸于紀伊國時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌、○中略

反歌

若浦爾鹽滿來者、瀉乎無美、葦邊乎指天、多頭鳴渡、

右年月不記、但傳從駕玉津島也、因今檢注行幸年月以載之焉

〔紀伊續風土記十九名草郡〕名高浦、○中略

日方浦の南にあり、其間人家相隔ること僅に五十間、名高倭姫世記には名方と書せり、國造家の記録に、中田、或中方など書せり、皆訓の相似たるより文字轉せるなり、古より名高き地にて、萬葉をはじめ、代々の詠歌いと多かり、

〔萬葉集七譬喻歌〕寄藻

ムラサキノナダカノカラノナリノイソニナビカムトキツツワル
紫之名高浦乃名告藻之於儀將靡時待吾乎、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思